第18号　　平成12年12月1日発行

みおしえ

豊かな心を求めて

埼玉教区浄土宗青年会

報恩感謝

源長寺　小林良明

いつものように、朝起きて顔を洗おうと洗面台の前に立つと、鏡に映る自分の顔がいつもと違うのに気付きました。左目が真っ赤に腫れていたのです。早速、眼科に行き、先生に診てもらいました。診察の結果「ものもらいです。但し、厄介な所が腫れているので治るまでは多少時間がかかりますよ・・・。」

まいったなあと思い、その後、薬局で五種類の薬を受け取り、今度は面倒だなあと思いました。しかし、いくら面倒だからといって腫れた左目をそのままには出来ず、いざ薬の包みを開けようとした時、自分は、あることを忘れていたことに気付いたのでした。

それは、つい一ヶ月前に拝聴させて頂いたばかりの、あるご住職のご法話で

「薬一錠は、指でつまめる小さなものですが、その小さな一錠は、研究の段階で、多くの動物が犠牲となり、出来上がっているのです。多くの動物の生命と引替えに、私たち人間の健康が維持されているのです。今度、薬を服用する場合にはありがとう、おかげさまという感謝の気持を持って薬を飲んで頂きたい。」というものでした。

たった一ヶ月前に諭されたにもかかわらず忘れそうになってしまった自分がとても恥ずかしく思えたのです。その後は、手を合わせ、薬を頂戴いたしました。

私たちが生きていく上では、他の人や多くのものによって支えられて生きています。生かされているのです。しかし、最近はこの大切なことを、忘れてしまっている人が大勢いるのではないでしょうか。

昨今、少年による痛ましい事件が続発し、問題となっておりますが、大人社会の鏡といわれる少年犯罪だからこそ、まず、大人である私たちが「自分一人の力だけでは生きていくことは出来ない。多くの力を頂いて、生かされているのだ」と気付くことです。気付いたなら必ずそこには感謝の心が芽生えるはずです。

感謝と喜びの中に生きていくことが、お念仏の教えであると言えます。お念仏を礎として、心豊かに私たちが過ごせるのならば、今日の「ムカツク」「キレる」そんな若者たちは減っていくのでしょう。

心（こころ）のケア「わずらいなし」

願生寺　齊藤實朗

ある新聞の人生相談欄に最近の少年による凶悪事件の続発を背景に、少年と街ですれ違うだけで足がすくむ恐怖心から離れられない女性からの相談が寄せられました。

その方は二〇代の主婦で四歳の息子さんの送り迎えに行くときでさえ、若い男性が自転車で通るだけで「何か悪いことが起きるのでは」と思ってしまい、息子さんを抱き寄せたこともあるそうです。

これに対して新聞の回答は「年に十件の凶悪犯罪があったとしても中高生は全体で一千万人近くいて、あなたが出会うのは一〇〇万人に一人であり、一〇〇万に一の危険を恐れるのはつまらないことです。

一〇〇万回自転車に乗れば恐らく一度は車にひかれるでしょうし、一〇〇万回餅を食べれば恐らく一度は窒息するでしょう。

日本では毎年一万人に一人の割合で交通事故の犠牲者がでています。もし中高生に会うたびに足がすくむなら車に出会うたびに腰を抜かさなければならなくなります。」とありました。

皆さんは確率論でまとめられたこの回答で女性が心の患いから離れられたとお思いになるでしょうか。

統計データをそれぞれの生き様にあてはめて目の前に起こりうる確率を把握することは大事かも知れません。しかし、人間の知識、経験による計らいだけでは、自分自身の生死を超えた普遍の安らぎはもてないのです。

法然上人は、

いけらば念仏の功つもり、しならば浄土へまいりなん。とてもかくても、此の身には、思いわずろう事ぞなきと思いぬれば、死生ともにわずらいなし。

【つねに仰せされる御詞】

（お念仏申せば阿弥陀仏様のご本願により）生きている間はお念仏の功徳が積もり、命尽きたらお浄土へ参らせていただけるのです。「いずれにしてもこの身には思い悩むことなどないのだ」と思ったならば、生きること死ぬことに対して悩みなどなくなるのです。

と仰せになっています。

永遠の世界に生まれかわる、極楽浄土に迎えとられる往生の未来を望み、今を生き貫くならば、苦しみの闇も晴れるのです。

自分の物差（ものさ）しだけでは不安・恐怖に心労し生きる望みを失うほどの混迷の世の中において、「わが名を唱えよ」とお示し下さっている阿弥陀様のみ心のままに、「どうか、お助け下さい」とお念仏すれば、阿弥陀様はこたえて下さるのです。

合　掌

手を合わせること。心をこめて、相手に信順する態度の表現と辞書にはあります。古くから今日に至るまで仏様に対してのみならず、人同士でも互いに行なう作法です。インドでは右手を神聖な手、左手を不浄な手として使い分けていますが、その両の掌を合わせることは、人間の中にある神聖な面と不浄な面とを合一したところに、人間の真実の姿があるという考えの現れとされます。わたしたちが普段慣れている作法は堅実心合掌といわれています。

思わず手が合わさる時があります。自己の心のいやらしさ、弱さに気付く時、大きなお陰に生かされ育てられていたことがわかった時、願を起こす時、人の為に祈る時などいろいろな場面を思い付きます。

現代は他人を拝まず、物に感謝せず粗末にします。不運やいらだちは周りの責任にして、権利を主張し義務を忘れ天地のお陰、親の恩に気付かず、自身にも家庭にも社会にも不平不満が渦巻いています。

善いこと、悪いこと、辛いこと、苦しいこと、悲しいことも拝んでいくことができますと、まわりの世界や環境が一変します。この心が忘れられている今、そこに気付き、目覚めることが大切です。

【編集後記】

今回は齊藤實朗・小林良明両上人に原稿の執筆をお願いした。

テーマには現在社会で注目されている「青少年」をとりあげてみた。両上人から視点の異なる味わい深い文章をいただき、心から感謝申し上げたい。

さて、今号より編集長の大役を務めることとなった。『みおしえ』は檀家の皆様に読んでいただくものなのでこれからも親しみやすさ、読みやすさを大切にしていきたいと考えている。どうぞよろしくお願いしたい。

〒三六二―〇〇四七
埼玉県上尾市今泉一五六　十連寺内
『みおしえ』編集室　代表　宇髙康哲

この用紙は再生紙を使用しています